

低学年児童の情動表出に対する教師の認知的評価に関する検討

芦田 祐佳 (東京大学大学院 教育学研究科 大学院生)

1. 研究背景と本研究の目的

初等教育現場において児童の情動面に配慮した教育実践を行う重要性が指摘されて久しい。しかし、教室における情動的支援 (emotional support) に着目したこれまでの研究の多くが、教師が情動的支援を行うことによって児童にもたらされる効果に焦点を当ててきた。そのため、情動的支援を行う教師が児童の情動面に対しどのように問題を認識し実践的な判断を行なっているのかについてはほとんど明らかになっていない。

先行研究では、児童が教室で怒りや悲しみといったネガティブ情動を表出する際、教師は情動的な困難感を抱き、この困難感を教師自身の実践力に対する自信 (教師効力感) によって乗り越えると指摘されている。しかし、教師は児童のネガティブ情動に対する指導や支援を担う立場にあり、教師自身の心情のコントロールとは異なる教育的な視点からも児童のネガティブ場面を認識していると予想される。そこで、本研究では児童がネガティブ情動を表出する仮想場面を提示し、その場面における教師の問題認識と実践判断に対し、教師効力感が及ぼす影響について検討した。

2. 研究方法

公私立小学校 22 校の教師 344 名 (男性 136 名, 女性 208 名, 教職年数 $M=13.16$ 年) に質問紙調査を行なった。

仮想場面 児童の特定の行動が極端に問題視されず、学習活動や他児童の状況に制約があるジレンマ場面を設定し提示した。具体的な指導が想起されやすいよう、「現在担当している学年」の児童を想定して回答するよう求めた。

問題認識 「他児童の問題度」と「学習の重要性」の2つ観点から問題認識をたずねた (7 件法)。

実践判断 指導の時間と場所の2つの観点から方略を提示させ、判断の理由をたずねた (自由記述式)。回答は、(1) 児童の情動の一過性や重大性に焦点を当てて判断する感情焦点型、(2) 児童の学習活動の進行に焦点を当てて判断する学習焦点型、(3) 児童の関係形成や自力解決に焦点を当てて判断する関係焦点型の3つの型に分類された。

教師効力感 教師効力感尺度 (春原, 2007) より 16 項目を選定し「教科指導効力感」「生徒指導効力感」を得た。

3. 研究結果

分析 1 問題認識に対する教師効力感の影響

問題認識に対する教師効力感の影響は認められなかった。また「現在の担当学年」による影響も有意でなかったことから、児童のネガティブ場面における教師の問題認識は、教師自身がうまく実践する自信があるかどうか、また児童の学年という雑駁とした学習や発達の理解からは十分に説明できないことが示された。

分析 2 実践判断に対する教師効力感の影響

3つの判断型の生起可能性に教師効力感の影響がみられた。教科指導効力感が高い場合、児童がネガティブ情動を表出する場面で、学習焦点型の判断を行いやすいことが示された。また生徒指導効力感が高い場合、感情焦点型の判断を行う可能性が高まるとわかった。この実践判断に対する教師効力感の影響は、教師の問題認識が実践判断に及ぼす影響を考慮しても認められた一方で、教師効力感と問題認識の交互作用はほとんどみられなかった。

4. 本研究の成果と課題

従来の研究では、児童のネガティブ場面において教師効力感は教師自身の内面調整に役立つという結果が示されてきたが、本研究によって、教師の教師効力感は具体的な実践行動を判断する過程においても機能することが明らかになった。教師効力感、児童のネガティブ場面において主体的に働きかける教師の情動実践を変えの一因として理解できる可能性がある。ただし本研究では、児童のネガティブ場面における教師の問題認識を規定する要因を説明することができず、教師の実践判断に対する教師効力感の影響を暫定的に示したにすぎない。今後は、仮想場面の妥当性や信頼性を見直しながら、教師効力感以外の要因についても十分に考慮して知見を拡充する必要がある。

【謝辞】 本研究にご協力くださいました多くの先生方に改めて厚く御礼申し上げます。